鬼瓦について

髙橋　香（(公財）かながわ考古学財団）

はじめに

鬼瓦は屋根を飾る瓦の中で最も目立つ瓦です。大棟の両端、降り棟、隅棟の先端を飾り、屋根を風雨から守るという実用的な面とともに、建物全体の構成を印象づける意義のある瓦でもあります。

相模国内においては、瓦を使用する建物が 10 世紀代以降減少傾向となり、瓦の使用が認められるのは永福寺の建立前後からで、鎌倉を中心に相模国内各所で瓦葺き建物が展開します。軒瓦の文様意匠の展開については相模国内を概観していますが、鬼瓦についてはこれまでありませんでした（小林・髙橋 2019)。ここでは、相模国内にみられる鬼瓦を紹介した後、そのルーツはどこにあるのか、さぐってみようと思います。

県内の鬼瓦について

神奈川県内で確認されている鬼瓦の類例について今回報告した満願寺を含めた５事例について述べていきます（第１・２図)。

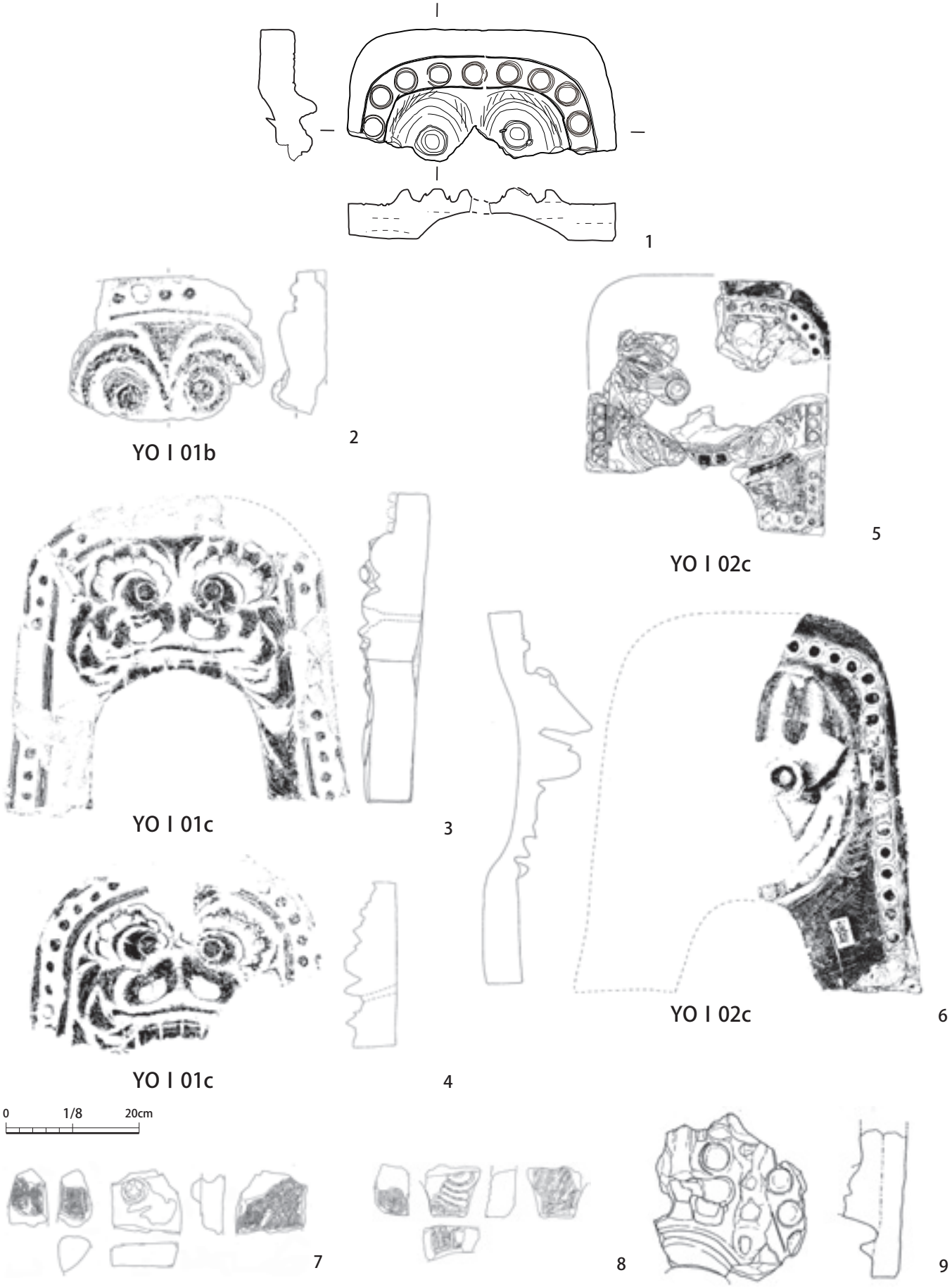
<u>岩戸満願寺（横須賀市）【第２図 1】</u>　岩戸満願寺で出土している鬼瓦は、笵によるものではなく手づくりによる製作です。粘土板を数枚重ね合わせて鬼瓦の本体を成形し、珠文帯は沈線で区画を施した後、円筒状の工具を押印して珠文をつくっています。粘土板の厚みは 5.5㎝、珠文はおおよそ直径 3.4㎝で、周縁にそって押印しています。眼の表現も円筒状の工具による押印で表現し、眼の上半は眉毛状に粘土凸帯を貼り付け、ナデ成形しています。粘土の盛り上がった部分に沈線でむかって左眉部分に 11 条、右眉部分にも 11 条の線を描いています。固定装置は背面に把手が付くタイプで、若干背面をくぼませ、把手状に粘土板をはりつけ、ここに紐などをくくりつけて固定していたのでしょう。岩戸満願寺では、胎土は精良で白色粒子を含みやや白色がかったあまい焼成である胎土のものと、やや暗褐色に焼成された胎土のやや粗いものの２種があり、後者は珠文帯の状況から、笵による型づくりの可能性が高いです。このことから手づくりによる鬼瓦と笵型による鬼瓦の２種が少なくとも存在していると考えられます。

<u>永福寺（鎌倉市）【第２図２～６】</u>　永福寺は、鎌倉市に所在する源頼朝が創建した寺院です。報告書によれば、４型式 13 種の鬼瓦片が出土しています（原

【第１図】 県内鬼瓦出土遺跡位置図

2002)。胎土が良土質なもの（YO Ⅰ類）と粗悪なもの（YO Ⅱ類）があるとし、笵のつくりによるもの（01）と部分的に笵を用いた手づくりのもの（02）として分類し、特大、大、中、小があります。屋根構造の部位によって作り分けられたと考えられ、YO Ⅰ 01、02 は鬼面文の作りが異なりますが、良質な胎土であることからⅠ期主要瓦、Ⅱ期水殿瓦窯跡の出土事例と類似するとし、ともに同じ生産地を想定しています。YO Ⅰ 01 は第２図に図示しているもので、笵による製作、眉の部分をヘラで調整し、眼の部分を引きたつように放射状に調整しています。固定装置は釘穴によるものでしょうか、鼻の孔が貫通しています。抉り部分に歯が表現されていることから、軒丸瓦を咬むような表情で、牙は上を向き、巻髪の表現が脚部分に凸状に施しています。葺き脚部分が高いのは、大棟などの熨斗となる平瓦を多く積む部位に葺いたものと考えられます。YO Ⅰ 01 ｃやｄとしたものは降棟や隅棟用に相当します。02 は、「笵の手作り」として分類され、満願寺同様、珠文帯の珠文は円形のスタンプ状のものを押印し、巻髪は沈線で表現されています。裏面もくぼませていることから把手などがとりつく形状と想定されます。手づくりで作成された鬼瓦の脚部分に「守光」「文長」の２種３型式のスタンプを押印しており、平・丸瓦ともに押印されているスタンプと共通することから、瓦工房の生産体制を解明するヒントとなります。

<u>下糟屋・丸山遺跡（第６地点）（伊勢原市）【第２図 7・8】</u>
下糟屋・丸山遺跡は、伊勢原市に所在する遺跡で中世城郭と考えられている丸山城です。堀とした遺構から



【第２図】 相模国内出土鬼瓦

鬼瓦２片、中世遺構外から１片が確認されています。堀から出土している鬼瓦片は、半円状に凸出した部位がありますが、珠文帯に相当するのか眼に相当するのか不明です。報告では「円形の押し付け」とあることから手づくりの部類にはいるでしょう。遺構外から出土したとする鬼瓦は葺き脚の右側部が残存するもので、表面、側面はヘラナデにより調整されており、表面はヘラ状工具によって同心円を描いています。沈線はかなり深めにかかれており、「髭を巻き上げた表現をする部分と考えられる」とあります。しかし、この脚部分に巻きひげを表現するのは古代に多い表現で、中世では永福寺、法隆寺の大湯屋の大棟にみられるものの少ない傾向にあります。

真勝寺（大磯町）【第２図９】　真勝寺は、大磯町に所在する行基創建といわれる寺院で、12 世紀以降は六所神社の別当寺となったとされています。また、治承４（1180）年富士川合戦の帰途に源頼朝が論功行賞を行った地とされています。中世瓦は採集瓦であるが、数点確認されており、軒平瓦は陽刻上向き剣頭文、軒丸瓦は左回り、右回りがあります。鬼瓦は、珠文帯と鬼面が若干残り、珠文と眼、鼻の部分が残存する資料です。珠文は円形の工具を押印する手づくりによる成形です。

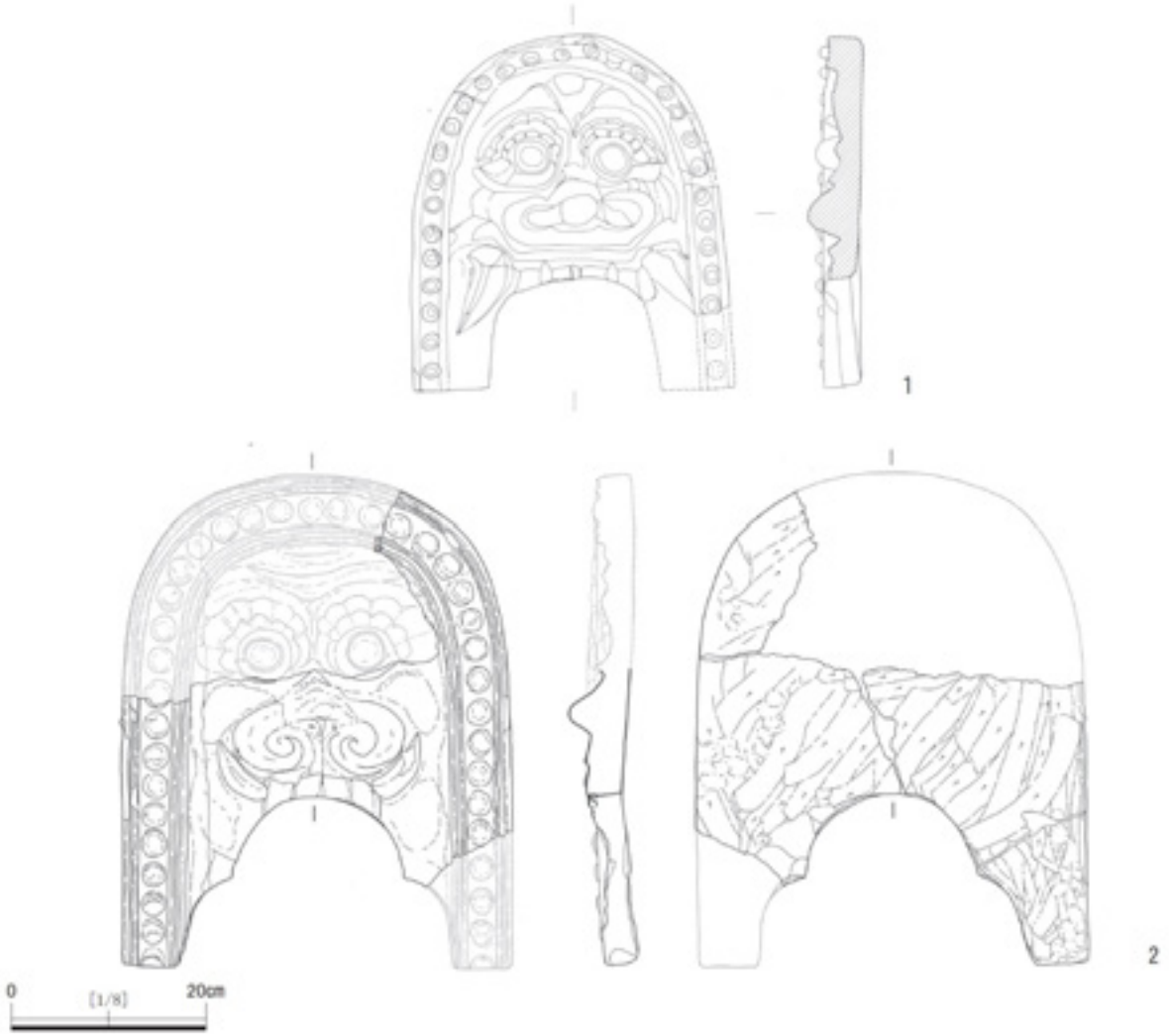
史跡称名寺境内（横浜市）　史跡称名寺は横浜市に所在します、鎌倉後期に創立された真言律宗系の寺院で、金沢北条氏の菩提寺です。13 世紀後半～ 14 世紀前半の永福寺Ⅲ期の時期の瓦の特徴に類似し、鬼瓦片は１点確認されています。珠文帯部分の珠文が２か所残存するもので、沈線などの区画があるかは小片の為不明です。厚さは 2.3㎝とやや薄での手づくりです。胎土は微妙な砂粒を含み、色調は灰白色です。１点のみの出土であるため判断しかねますが、円形の工具を押印した可能性が高いです。

岩戸満願寺の鬼瓦のルーツは－相模国の鬼瓦のルーツは－

岩戸満願寺から出土している鬼瓦は、①珠文帯をみると押印していること、②固定装置が把手のタイプの鬼瓦であることから、永福寺でみられる笵による鬼瓦より若干新しい要素が含まれています。となると、相模で最初に導入された鬼瓦は永福寺の鬼瓦と考えられますが、このモデルとなった鬼瓦はどこの資料になるのでしょうか。院政期以降、瓦が使用される建物や生産地が限定的になるため、参考になる地域が限られてきます。その中で、構成要素、眼の表現などを参考にすると、鳥羽離宮の金剛心院の鬼瓦があげられます【第３図１】。

鳥羽離宮は、応徳３（1086）年の中頃、白河天皇による院政が開始される直前に着手され、白河天皇、鳥羽天皇によって約 70 年間継続された離宮です。院政期の鬼瓦は、笵により製作された鬼瓦で、珠文帯は界線も沈線ではなく凸線で表現され、眼や眉、ほほ、鼻の部分が全体的に突出しています。鳥羽離宮の瓦生産は、鳥羽離宮南殿及び東殿は播磨、尾張（東殿のみ）が担い、11 世紀後半から 12 世紀後半まで供給されたと推定されています。金剛心院から出土している鬼瓦の生産地は播磨であり（上村ほか 2017）、確実な同笵の鬼瓦は確認されてはいませんが、林崎三本松瓦窯、神出窯から鬼瓦が出土しています【第３図２】。金剛心院も林崎三本松瓦窯の生産地出土の鬼瓦も笵による製作で、特に林崎三本松瓦窯から出土している鬼瓦の特徴が永福寺出土鬼瓦に類似しています（第３図）。主観的な判断にはなりますが、突出する眼と眼の周辺を笵の抜き取り後にヘラ状の工具等をもちいて内側から外側へ放射状に調整している様は近いと考えられます。また、牙の向きも他の鬼瓦は下向きが多い中、上向きであるところも、林崎三本松瓦窯で生産された鬼瓦を鳥羽離宮でみて永福寺所用瓦にイメージしたのではないでしょうか。ただ、葺き脚部分の形状が異なっており、これは屋根構造の違いの相違であると考えられます。岩戸満願寺の鬼瓦は、永福寺より多少遅れて製作にはいったものと考えられますが、同様に鳥羽離宮などにみられる鬼瓦の特徴とはまた異なります。眉部分に肉付けさせて沈線を施す意匠は、播磨にも尾張にもみられません。八事裏山瓦窯の瓦の供給があることから、尾張方面からのモデルを探してみましたが、該当しそうな個体は残念ながらみられませんでした。駿河では天神洞遺跡から鬼瓦の出土事例がありますが、笵づくりの鬼瓦であることや陶器質の焼成とあることから尾張方面を産地とする鬼瓦の可能性が高いです（池谷 2019）。むしろ、永福寺で出土している手作りの鬼瓦に沈線による表現がみられることから、永福寺からの影響を考えた方がよいのかもしれません。また、笵型の可能性がある鬼瓦のルーツも、残存部位が狭い為、多くを追求することは困難です。今後、脚部などの部位が出土することによって屋根構造の判断も可能となりますので、資料の増加をまって再検討したいと思います。

やや緩い表情から我々がイメージする荘厳な鬼瓦に



【第３図】 鳥羽離宮、林崎三本松遺跡出土鬼瓦

近い鬼瓦になるのは、鎌倉時代後期にはいってからといわれ、鬼瓦製作に関して変化があったと推測されています。瓦笵の製作には、官営ないし寺営の工房に属する画工や絵師などが関与しているとされ、その後ろだてがなくなったことで緩い鬼瓦に変化したといわれています（山本 1998）。笵の作成には、統制された技術系統のもと製作されたものであったのが、瓦づくり職人の手にうつり、見様見真似でつくるようになっていった為、稚拙な表情の鬼瓦が一時期展開するのでしょう。鎌倉後期になると鬼瓦の表現がより盛り上がり、下顎が表現されるようになっていきます。顔面部を載せる地板がアーチ状から台形に変化し、珠文も大粒になります。鬼瓦はやがて「鬼師」とよばれる鬼瓦専門工人集団による製作となり、より立体的な威厳のある鬼瓦が製作されていきます。また、鬼瓦の変化は屋根構造の変化にも起因していると考えられています。８世紀後半頃から棟を高く積む傾向があり、野屋根構造が採用されるとさらに屋根勾配がきつくなり、棟の高さも高くなっていく構造になっていきます。屋根の骨組みの上にさらに材を用い、もう一つ別の屋根を乗せると屋根は全体に高くなり、威圧感がでるような建物となります。したがって、隅棟や降棟を二段構成にして、高くなりすぎてしまった棟の高さを逓減する構造が編み出されたと考えられます。それによって棟先をとめていた鬼瓦は、上段部分稚児棟に一つ（二ノ鬼）、棟端に一つ（一ノ鬼）、大小の鬼瓦が葺かれる構造となるのです（山本 1998）。二ノ鬼の出現については、12 世紀後半の絵画資料により判断されることから、院政期頃には大小さまざまな鬼瓦があったことがわかり、出土資料の中で大小があるのは理由があったことがわかったのです（島田 2007）。

※参考文献については紙面の都合により省略しました。